

アユ資源の状況について

1 アユ資源の状況

(1) 天然河川の産卵状況(主要11河川)

- ・ 令和3年8月下旬から2週間に1回のペースで6回調査。
- ・ 総産卵数は156.2億粒と平年の約2倍 (平年比221.9%)。
- ・ 8月中旬の降雨により産卵の開始が早まり、産卵ピークは平年と比較してやや早い時期(9月中旬)となった。また、親魚資源量が多かったことに加え、ピーク時に河川環境が良好であったことから、産卵数が多くなったと推測。

表1 調査次別合計産卵数と平年値との比較 (単位:億粒)

調査次	1次	2次	3次	4次	5次	6次	総産卵数
	8/27-9/1	9/13-16	9/27-30	10/11-14	10/25-27	11/8-11	
R3	2.7	<u>136.2</u>	12.4	1.8	2.5	0.6	156.2
平年値*	0.1	19.0	<u>27.1</u>	9.3	0.5	0.0	70.4

※平年値: 過去10年のうち、最大値と最小値、肥満度低下により産卵が激減しH24年および過小評価と判断されたH30年の値を除く平均値。

(2) 湖中アユの資源状況

①湖中仔アユ(ヒウオ)生息状況調査

□ 調査概要

- ・ 河川でふ化し、琵琶湖へ流下した仔アユの生息状況を把握する調査。



図1 採捕されたアユ仔魚と調査風景(デモ)

1cm~4cmほどのアユが採捕される。



図2 調査水域

□採捕尾数

- ・ 第1次調査(10月4、5日): 332尾/曳網 平年(142尾/曳網)の234%
- ・ 第2次調査(11月2、4日): 431尾/曳網 平年(67尾/曳網)の643%
- ・ 第3次調査(12月2、3日): 179尾/曳網 平年(18尾/曳網)の994%
- ・ 調査を通じて、採捕尾数は平年を大きく上回った。

②周回コースによる魚群調査

- ・ 2月期を2月9日、10日に実施。
- ・ 魚群探知機による魚群数は190群で、平年値182群の104%となり、ほぼ平年並み。
- ・ 魚群数として計数されない小群未満の魚群が多く観察された。



図3 魚群調査結果（2月期）

2 早期アユの漁獲状況

- ・ 12月1日から活アユ漁獲開始（12月注文量12,052kg）
- ・ エリの操業合計統数は45統（16漁協）。（R2:41統 R1:46統）
- ・ 初日の漁獲量は1,374kgで過去10年の平均値5,175kgの26.5%。
- ・ 初日の漁獲量が平年値よりも大幅に少ないのは、荒天だったことにより出漁できたのは16漁協のうち5漁協のみで、出漁した漁協もすべての網を上げられないなど、部分的な操業にとどまったため。
- ・ 15日目（12月15日）に累積漁獲量12,333.5kgとなり一旦終了。
- ・ 鮮魚の漁獲は、12月25日まで継続。
- ・ エリ漁は1月12日に再開し、活アユは1月25日でほぼ充足（2,756kg）。

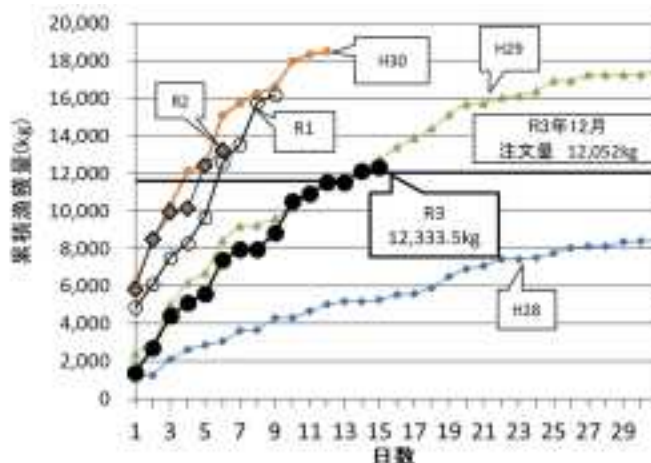


図4 早期活アユの漁獲状況

3 まとめ

- ・ 今期は産卵量が多く、河川水量も豊富であったことから、ふ化や流下が良好であったと推測され、密度効果で体長が小さく推移していると考えられる。解禁当初のアユ耳石日周輪による成長解析でも10月以降の成長が遅くなっている。
- ・ 産卵調査、ヒウオ生息状況調査ともに平年値を大きく上回っており、初期資源尾数は平年よりも多いと推測された。2月期の魚群調査で平年並みとなったが、魚群数として計数されない小群未満の群れが多く、2月期も資源は多いと推測。
- ・ 今期の12月解禁当初のアユの平均体長は35.6mmと平年の39.0mmより小型であった。体長約4cm未満のアユは大きな群れをつくらないためまとめて漁獲されにくく、また、入網しても網目から抜けるものも多く、さらに、荒天による操業見合わせと相まって、解禁当初は低調な漁獲となったと考えられる。
- ・ 今後、アユが成長し、魚体サイズが大きくなれば漁獲が進むと考えられるが、今期は降雪が多いため、水温低下による減耗や成長低下が懸念されることから、今後の資源動向等を注意深く調査する。